

真の天才と作られた天才

新しいモノの方が分かりやすいか？

2022/04/03



Johann Sebastian Bach
1685-1750



Wolfgang Amadeus Mozart
1756-1791

天才バッハと天才モーツァルト

天才には、二種類あります。生まれつきの天才と成長し進化して天才になった天才と。

音楽界でいえば 前者は、バッハ（1685-1750）とモーツァルト（1756-1791）でしょう。この二人は生まれつきの天才です。

バッハは、1703年、18歳のときに、アルンシュタットの新教会に新しく設置されたオルガンの試奏者に選ばれ、優れた演奏を披露して、そのままその教会のオルガニストになりました。この時に二人の兄のために書いた「カプリッチョ 変ロ長調：最愛なる兄の旅立ちに寄せて」と「カプリッチョ ホ長調：ヨハン・クリストフを讃えて」を作曲しました。愛情に満ちた、傑作です。完璧に作られたこの作品は、18歳でなければ書けない、「若さと創意（インスピレーション）」にあふれた天才の作品です。

音楽家バッハのもっとの幸せな時期は、ケーテンの領主レオポルト公の下で過ごした5年半でした。彼が、32歳から38歳までのときです。前任地ワイマールの楽士長（コンサートマスター）を務めていたバッハでしたが、楽長になれずじまいでしたので、ついに見限ってケーテンに移る気になりました。それ

を知ったワイマール公ヴィルヘルム・エルンストはバッハを一ヶ月近く城内の牢屋へ監禁したものの無駄でした。晴れてケーテンの宮廷楽長になったバッハは、ケーテンの家臣の中では二番目に高額な年額四百ターラーという高給を与えられました。ちなみに、ワイマール時代の俸給は年額約百六十ターラーにすぎませんでした。ケーテン公レオボルトは、バッハより九歳年下の青年貴族で、音楽に対する深い教養を身につけ、自身ヴァイオリン、ヴィオラ・ダ・ガンバ(チェロの前身)、ハーブシコードなどの楽器を弾きこなし、美しいバリトンの声を持っていたといわれています。レオボルト公とバッハとの関係は、音楽を通じた友人に近いものでした。バッハは、領主のために、領主のお気に入りのオーケストラ曲や協奏曲、寮内楽曲、独奏曲などの傑作を次々と作曲しました。「管弦楽組曲」「ブランデンブルク協奏曲」「ヴァイオリン協奏曲」「無伴奏チェロ組曲」「無伴奏ヴァイオリン・ソナタ」「平均律クラヴィーア曲集第一巻」などなどです。なんという、贅沢さでしょう。

ケーテン公が結婚して、その王妃が大の音楽嫌いだったので、バッハの住める環境ではなくなりました。1723年にライプツィヒの聖トーマス教会のカントル(合唱長)に就任しました。1727年4月11日にライプツィヒの聖トーマス教会で初演された「マタイ受難曲」と1724年(39歳)から死の前年の1749年(64歳)にかけて作曲された「ミサ曲 ロ短調」は、人類がもつ最大で最高の宗教曲です。満を持して放った、天才の作品です。

14歳にして一流の作曲家を越える音楽性と技術をもっていた天才

モーツァルトは、3歳のときからチェンバロを弾き始め、5歳のときに作曲した「アンダンテ ハ長調 K.1a」の楽譜が残っています。14歳のとき、父と一緒にイタリアを旅行して、ローマのシスティーナ礼拝堂で聴いた門外不出の秘曲グレゴリオ・アレグリの9声部の『ミゼレーレ』を暗譜で書き記しました。9声部ですから大変です。このエピソードこそ、モーツァルトの天才を如実に物語るものではありません。14歳の少年が、アレグリという一流の作曲家の巨大な作品をすでに十分に理解するだけの能力をもち、それ以上の技術を持っていたことを示しているからです。彼の最大傑作は、1786年30歳のときに初演した歌劇《フィガロの結婚》です。どの音をとっても、モーツァルトの若さと勢いと創意と工夫で満ちていて、楽しみと喜びが溢れています。ところが、内容は、60歳でなければ書けない人生の哀感と幸せのドラマで、すべての登場人物がウィン＝ウィンで終わる本当の喜劇です。まさに、年齢と時代を越えたオペラ史上に冠たる天才の作品です。

作られた天才ロッシニとヴェルディとワーグナー

ところが、オペラで言えば、成長し進化して天才になった天才とは、ロッシニであり、ヴェルディやワーグナーです。概して、彼らの若書きの作品は、どれも欠点が多い習作であって、晩年の名作と比べて格段に質が落ちます。このオペラの三大偉人も、天才ではありませんが、生まれつきの天才ではありません。努力して、勉強して、成長・進化して、ついに天才の域に達した天才たちです。彼らと、バッハ・モーツァルトとはどこが違うのでしょうか？それは、時代が違ったのです。

ロマン派以降のオペラの作曲家たち、ロッシニも、ヴェルディも、ワーグ

ナーは、時代と共に生きなければならなかった作曲家ばかりです。いってみれば、「現代(近代)作曲家」であり、「同時代作曲家」(contemporary composer)です。自分たちが生きた時代と社会を反映した作品を書かねばならなかった作曲家たちです。時代について、絶えず、敏感でならなければならなかった作曲家たちです。作曲家としての才能だけではなく、時代や社会や興行主と共に、成長・進化・発展しなければ作品が書けなかったのです。君主や教会や雇い主の意向に従って、宴会や式典やカンタータなどの「機会音楽」(英: chance music. 独: Gelegenheitsmusik)を書いていた時代のバッハやモーツァルトとは違ったのです。

時代と関与しつづける批評家としての小林秀雄

小林秀雄の名言の一つに、「古いものよりも新しいものの方が分かりやすいに決まっている」というのがあります。これは、世間の、一般的な人間の感覚とは違った、反対の考え方です。私たちは、例えば、俳句でも、短歌でも、現代の前衛俳句や前衛短歌は、全く分かりません。前衛俳句と言われるものに次のようなものがあります。

雨をひかる義眼の都会	死亡の洋傘	島津 亮
帰る円盤孵る銃座に毛をふく雨		大原テルカズ
音楽漂う岸侵しゆく蛇の飢		赤尾 兜子
母に肖て薄明エトナの山の秃鷹飼ふ		加藤 郁乎

さっぱり分かりません。これならば、古い時代の百人一首や芭蕉の短歌や前句の方がよく分かります。では、小林はなにをいっているのでしょうか？小林秀雄は、批評家です。絶えず、彼が、いま、生きてる現代と言う時代に「関与」(commit)しつづけている批評家です。現代の社会やそこから産まれる問題について、絶えず、疑問を抱き、関心をもっている批評家です。これらの前衛俳句にも、共感することが出来るのでしょうか。その彼にして言える、言葉です。

野球と将棋の若き天才

いま、現在、天才と言え、野球の大谷翔平君と将棋の藤井聡太五冠でしょう。この二人は、絶えず相手が代わり、絶えず自分のコンディションが変わるなかで、着実に、成績を上げてきている天才だちです。それこそ、変化をつづける状況に、常に、しっかりと「コミット」しつづけてきたおかげです。ちょうど、土曜日(2022/04/02)の朝日新聞の「be」が、お二人が若いときに(今も若いのですが)語った言葉が載っていました。

「ようやく扉の前かな。扉は押し続けているんだけど、まだ、びくともしない。扉が1枚なのか、2枚、3枚あるのか分からない。けど、分かっていたら面白くないですから」(15年1月3日)。大谷翔平選手は投手と打者の「二刀流」で初めて実績を残したプロ2年目のシーズン後に、こう語った。

棋士の藤井聡太さんは14歳で登場。「10代後半から20代前半で

ピークに達していないといけないのかな、と思います。(20歳の時の自分のイメージは?) うーん……。今の自分とは比べものにならないぐらい、強くなっていたいです」(17年7月15日)。その視線は着実に自身の将来を見据えていた。

お二人とも、はじめから、自ら変化をし、成長と発展をつづけ、高みに登ることを使命としています。二人に共通するのは、決まった相手があることです。絶えず、変化しつづける時代と変化しつづける相手を見ずえて、しっかりと相手に「コミット」しながら、相手よりも強く、上手くなろうと、進歩・発展・成長・努力・研鑽をつづけていることです。「天才になろう」というこの思いは、生まれついで天才バッハとモーツァルトにはありません。バッハとモーツァルトは、時代を超越しています。返って、変化しない時代に、自らの存在と価値を強いるのです。大谷と藤井は、時代に密着し関与しながら、常に身構えていることです。小林もそうです。「自己の同時代性」を大事にしています。時代と共に生き、時代を超越しようという思いがすべてです。

蛙はなん匹？

また、たとえば、俳句(正しくは前句)の分かり易い例として芭蕉の「古池や かはず飛び込む 水の音」と先ほどの前衛句のどれか一つを比べて見れば、直ぐ分かることですが、芭蕉の句はよく分かります。でも、実は、この句は、みなさまが理解しているほど、分かり易い句ではありません。間違っ理解しているのです。「この句の蛙はなん匹ですか？」と訊かれて、正確に答えられる専門の文学者はそういません。詳しくは、私の書いた「蛙は、なん匹？ 芭蕉の『古池や』の謎を解く」をお読みいただければよろしいでしょう。(笑い) 古いものほど研究が進み、文献もたくさんあって、評価が定まっているからと言って、本当に、良く理解しているかと言えばそうでもありません。当時の同時代の歌人たちは、この芭蕉の破格の句を、面白がって楽しみました。彼らには、作家と時代を共有する分かり易さがあるのです。では、なぜ、私たちは、モーツァルトやロッシニのオペラと比べて、ショスタコーヴィチやバルトークやアルバン・ベルクやドビュッシーのオペラを「分からない」というのでしょうか？



桜は匂うか？

いま、日本は桜の季節です。日本中が、花見で浮かれています、それで、桜の和歌や句と言え、直ぐに、本居宣長の「敷島のやまと心を人とはざ、朝日に匂ふ山桜花」や『詞花集』にある伊勢大輔の「いにしへの 奈良の都の八重桜 けふ九重に にほひぬるかな」が思い浮かぶでしょう。でも、桜は匂いはしません。むろん、匂いはあります。桜の香水もありますから、匂うサクラもあります。オオシマザクラやヤマザクラの系統の桜には芳香があり、それらの交配で生まれた特に香り高い里桜は「匂い桜」と呼ばれています。あの独特の甘い香りの主な成分はクマリンといって桜の葉や花を塩漬けにす

る過程で生まれるものだそうです。満開の桜は、あまり匂わないのです。

でも、昔から、桜は匂うことになっています。本居宣長や伊勢大輔の歌や 江間章子の「夏の思いで」の歌詞の2番「水芭蕉の花が 匂っている」もそうです。なぜ、桜や水芭蕉や菫(室生犀星の詩にあります)は、実際に匂わないのに、詩人や歌人は、「匂い」とか「匂う」とかいうのでしょうか？

それは、古い言葉が、現代の言葉と同じ意味だと思っているからです。単なる誤解です。この歌や詩の「匂う」とか「匂い」は、モノの香りではなくて、「鮮やかに色づく。特に、赤く色づく。また、色が美しく輝く。照り映える。内面の美しさなどがあふれ出て、生き生きと輝く」という、現代の私たちが知らないもう一つの意味なのです。「美しく色づいて盛んこと」をいう古い言葉です。花には、この二つの意味を持つ「匂う」があることを知らないのと、本当の歌の意味は分かりません。万葉集にある小野老(おの の おゆ)の有名な歌「青丹よし 奈良の都は 咲く花の 匂うがごとく 今盛りなり」は、この二つの意味を持っているのでしょう。「匂うがごとく」というのが曲者です。古いものの方が分かりにくいと、小林がいうのはこのことです。

現代音楽・オペラへの理解は社会へのコミットメント次第

現代句でも、社会や時代に「密着」(Commit)していれば、よく分かる句もあります。「戦争が廊下の奥に立ってゐた」という渡辺白泉の無季語の現代句は、いまは、だれにでもよく分かる句です。「プーチンが廊下の奥に立ってゐた」とすれば、より現実味が感じられるでしょう。これは白泉が26歳の時の昭和14年(1939年)に詠んだものです。昭和12年に始まった日中戦争がドロ沼の様相を呈し始め、昭和16年(1941年)の12月には真珠湾攻撃が敢行され、太平洋戦争に入っていきます。昭和14年では日本の国内の雰囲気もまだ戦争に対して楽観的な雰囲気もあったのですが、この句は、昭和13年(1938年)には国家総動員法の制定されて、戦争の予感がし始めたときの作品です。このほかにも、白泉には、「銃後といふ不思議な町を丘で見た」「玉音を理解せし者前に出よ」という句もあります。現代句への理解は、私たちが、いかに、現代と言う時代と社会に対して、密に、コミットメントしてるかどうかに掛かっています。政治家も、ジャーナリストも、学者も、経済人も、今回のプーチンの愚行を「想定外」だとおもっていました。残念乍ら、予想した天才は一人もいなかったのです。「古いものよりも新しいものの方が分かりやすいに決まっている」とはいえず、日々、密着し、関与していなければ、新しいものはいつまで経っても難しいのです。

このことを、小林は言っているのです。

現代音楽と現代オペラへの理解も、同じことです。この危険は現代に生きる私たちは、常に、現代音楽と現代オペラを見つづけることが、必要です。芸術家を信じましょう。

都築正道